国立大学法人千葉大学学長の業績評価結果について

学 長： 横 手 幸太郎
任 期： 令和6年4月1日～令和10年3月31日

評価期間： 令和6年4月1日～令和7年3月31日

【評価結果】

国立大学法人千葉大学学長選考・監察会議は、国立大学法人千葉大学学長の業績評価に関する要項に基づき、令和6年度における横手 幸太郎学長の業績評価を実施しました。

令和7年5月20日開催の学長選考・監察会議において、学長の業績評価の実施手順等について確認するとともに、業績調書に記載された基本方針、大学運営、教育、研究、社会連携・社会貢献、国際化、附属病院、附属学校及びその他の各項目に係る業績について、6月6日までに書面による審査を実施しました。

令和7年6月19日開催の学長選考・監察会議において、横手幸太郎学長へのヒアリング及び監事との意見交換を行い慎重に審査した結果、優れていると評価する結論に至りました。

【評価内容】

前学長の急逝による学長選考後に選考結果等について様々な意見が出されるなど、厳しい船出の中、強いリーダーシップを発揮し、未来志向の新たなビジョン（YOKOTE VISION）を提示するとともに、学長メッセージの発信や学長と部局長や新任教授との意見交換を実施するなど、学長自らが積極的かつ迅速に行動し、学長就任1年目を着実に取り組んだ点を高く評価します。

国立大学法人を巡る環境が厳しさを増すなかで、千葉大学が目指すべき方向をより明確にし、改革の流れを加速化し、全学が一致して取り組むために、学長にはより強いリーダーシップの発揮を期待します。

令和7年6月19日

国立大学法人千葉大学
学長選考・監察会議

業績調書に係る審査結果（集計）

評価項目	評価
1 基本方針	4.3
2 大学運営に関する事項	4.4
3 教育に関する事項	4.0
4 研究に関する事項	4.4
5 社会連携・社会貢献に関する事項	4.0
6 国際化に関する事項	4.1
7 附属病院に関する事項	4.1
8 附属学校に関する事項	3.9
9 その他	4.0

※評価は、各委員による評価の平均値を示す。

【評価及び評価内容】

評価	評価内容
5	期待を大幅に上回る業績をあげている／非常に優れている
4	期待を上回る業績をあげている／優れている
3	期待する程度の業績である／良好である
2	期待する業績を下回っている／やや努力を要する
1	期待する業績を大幅に下回っている／努力を要する

特筆すべき事項：

【大学運営】

- ・学長は、令和6年4月着任以来、千葉大学のために精力的に仕事をしている。
学長は、教職員3615人、学部学生10000人強、大学院生3380人を擁する総合大学が一体となって発展する道筋を示し、実行しなければならない。学長は、このやりがいのある仕事に熱意を持って取り組んでいることが業績調書からうかがえる。特に部局長との意見交換、新任教授との意見交換会などの取り組みは、多方面にわたる学部、価値観を異にする教員を一つにまとめて、千葉大学というアイデンティティを築く上で大きな役割を果たすであろう。加えて、学部との連携を深めるためには、学部教授会に赴き、学長の考えを伝えると同時に、教授の多様な意見に耳を傾け、議論をし、運営に生かす努力が必要である。実行してほしい。
- ・さまざまな組織が全学を縦横にまたがる形でつくられているが、その一方、教職員の負担が増えるのではないかと心配になるが、教員の負担軽減に資する取り組みが行われている。事務職員の負担も相当に増えていることが想像出来る。事務職員の働き方についても気を配ってほしい。
- ・就任早々新たなvision (YOKOTE VISION) を策定し、本学の構成員が意識すべき行動基準を明示した事は、大いに評価できる。また、学長メッセージの定期的発信や部局長との意見交換実施も、今必要な適切な行動だ。
- ・組織改革では、「総合技術マネジメント機構の設置」もtimelyな施策だ。
- ・ガバナンス強化として、YOKOTE VISIONは特筆に値する。学長のメッセージ（英語版を含む）を発信したのも評価に値する。
- ・学長メッセージの発信や、部局長・新任教授との意見交換、記者懇談会の開催、各種機関への訪問や来訪者への応対等、様々な機会を捉え「顔の見える学長」として積極的に活動することにより、学内における求心力と学外におけるプレゼンスを高めていることは、際立った特色と思う。
- ・大学運営において、新たなYOKOTE VISIONを提案し、部局からのヒアリングや若手の教授との意見交換をしており、素晴らしい試みと思う。将来的に結果に結びつくことを期待している。
- ・令和7年3月発出「YOKOTE VISION」の構成要素は端的かつ明解で、教職員にも浸透し始めていると感じる。高いタスクを掲げるだけでなく、教職員が意欲を保ちながら大学人として本学に貢献できるようなメッセージが込められている点も評価できる。一斉配信メールによる学長メッセージもタイムリーかつ効果的である。
- ・千葉大学の将来構想と実現に向けて「将来構想検討WG」を立ち上げるなど、中長期的な方略を着々と実施していることは大いに評価できる。
- ・学内特区組織「千葉大学データサイエンスコア」や千葉大学BIHなど、未来志向の組織が柔軟かつ速やかに整備され、大学の機能強化が図られている。
- ・適宜教職員、事務職員に学長が今考えていること、意見を共有してほしいことを発信されていることはとてもよいと思う。また新任教授の意見交換を行う場を設け、これから大学を担う方の研究を理解しようとする姿勢は、学長として好感の持てる行動と評価できる。
- ・前学長の際に採択されたJ-PEAKSに関わる事業も、スムーズに軌道に乗せる1年間の功績は評価される。

【教育】

- ・学長就任以降、よく頑張っておられる、と感心している。特に86国立大学の中で、本年も全国一の入学者選抜試験志願者を集めていることは、特出大書できる事実である。
- ・入学者選抜試験志願者10年連続1位は、千葉大学が、高校生、高校の教師、保護者に高く評価されていることを示している。学生を含め、教職員、さらに経営協議会メンバーもそのことに誇りを持っている。全国的に博士課程大学院入学者が減少している中で、令和6～8年度の期間に平均208人の大学院生（博士後期課程）に対し、年290万円（合計6億円）の奨学金を支給する取組は、素晴らしいことである。彼ら／彼女らが将来の千葉大学の礎になることを期待している。今後、そのために必要な資金は、学内外からの寄付によって続けられるよう努力してほしい。経営協議会委員の1人として、貢献したい。
- ・「アントレプレナーシップセンター」の設置や「博士後期課程学生支援」の推進も適切な施策だ。

- ・教育に関しても、入学者選抜試験志願者国立大学の10年連続1位というのも高く評価される。アントンプレナーシップセンターも設置したことは素晴らしい。
- ・「成果を中心とする実績状況に基づく配分」がプラスに転じたのは慶ばしいことと思う。
- ・教育に関する事項においても、多くの入試志願者を維持しており、JSTを通じた学生支援、国際交流も積極的にされていると思う。

【研究】

- ・科研費、論文数も順調に伸びている。その一方、特別推進、基盤Sが見当たらないのが淋しい。研究でトップ大学にランクされるためには、ピークとなるような研究業績が必要である。J-PEAKSのテーマを核として、千葉大学の看板となるような研究をさらに発展させてほしい。JST創発研究者の将来に期待したい。
- ・J-PEAKSに採択され、それを一つの核として、若手支援プログラムを支援していることは高く評価できる。科研費、電子ジャーナル、オープンアクセスなどの研究のためのインフラに力を入れているのは重要な取り組みである。
- ・数々の研究支援策の実施、スタートアップ創出支援強化も評価できる。
- ・研究面でも、学術研究・イノベーション推進機構を設置し、科研費の応募件数の増加と科研費新規採択件数の増加は喜ばしい。
- ・J-PEAKS「研究支援プログラム」やJST「次世代研究者挑戦的研究プログラム」等、若手研究者や博士後期課程学生への支援が拡充されているのは評価に値する。今後、さらに多様な分野の研究者が応募しやすいよう制度の整備を期待する。
- ・電子ジャーナルの再講読も研究費の厳しい状況下で歓迎すべき取組である。
- ・研究においてはJ-PEAKSの採択、各種若手研究者の助成などを行って成果を挙げている。
- ・国際高等研究基幹の研究支援プログラムやオープンアクセス加速化事業によるAPC支援は、若手・中堅研究者にとって非常にありがたく、研究継続・発信のモチベーションに直結している。
- ・IMOの活動も前学長から継承されたものを活かしながら、国際高等研究基幹を拡大発展させる活動は評価される。
- ・オープンアクセス加速化、そして大学発ベンチャー創出支援など、これまで十分に展開されてきたとはいえない事業に理解を示しながら拡大発展させていこうとする姿勢が見られ、評価される。

【社会連携・社会貢献】

- ・社会からの応援を得ることは、大学にとって重要である。千葉県、千葉市、墨田区などの自治体と連携していることは、非常に重要である。県に学長自ら働きかけ、約6億円の補助金交付を受けるなど(附属病院に関する事項)県と関係が密接になり、県も大学に期待しているのは、素晴らしい。
- ・経営協議会に、委員として千葉県知事が出席できるようになることを願っている。
- ・社会連携・社会貢献に関しても創立75周年事業を完遂したことも評価される。
- ・社会連携・社会貢献に関する事項では75周年記念、スポーツを含めた連携など大変優れた成果を挙げている。

【国際化】

- ・千葉大学の売りの一つであった「全員留学」が、コロナ禍、さらに円安により、理想的な形で進められなくなったのは残念であるが、オンライン講義などで「留学」と見なすのは無理があるのは確かである。ただ、全員留学は授業料値上げの一つの理由になっていたのも、学生、保護者からそのことが指摘されたときの対応として、それに代わる十分な教育システムを構築することが大切だと思う。たとえば、Nativeによる英語の授業を増やすなど国際化に向けた教育を推進してほしい。
- ・国際化に関しても、タイを始めとする国際化に努力した様子は評価される。
- ・国際化においても多くの留学生の受け入れ、また学長自ら海外へ出向き積極的に活動を行っている。

【附属病院】

- ・ 病院長をしておられただけに、42ある国立大学病院の中で大きな成果を挙げていることも、素晴らしいことである。
- ・ 千葉大学は国立大学附属病院のロールモデルとして、特に働き方改革を進めてほしい。主治医制度を変え、チーム医療を患者とその家族に理解してもらい、看護師と同じような夜勤完全交代制を進めてほしい。
- ・ 日本の臨床研究は小規模なため、国際的に信頼されない傾向がある。病院規模を越えて、せめて全国立大学規模の臨床研究を構築してほしい。
- ・ 地方の医療システムにおける大学病院の役割について、将来計画を立てるべきである。特に医師会と共同して、医師会の医師が交代で救急医療に参加するくらいのシステムが出来れば、救急の大学依存度も変わり、医師会と一体となった救急医療システムのさきがけとなるであろう。
- ・ 附属病院に関しても、「医師の働き方改革」の中で、文部科学省研究拠点形成費等補助事業「高度医療人材補助養成拠点事業」に採択されたことも大いに評価される。
- ・ 附属病院の運営、経営にも鋭敏な感覚をお持ちであり、県との交渉で約6億円の補助を頂いた。附属病院ビジョン2040の策定においても積極的に関与された。

【附属学校】

- ・ 附属学校は経営協議会の話題になることは少ないが、教育学部と地域にとっては重要な存在である。学長が直接附属学校に出向き教育、保護者と意見交換しているのは、附属学校にとっても励みになることであろう。
- ・ 附属学校に関しても、足繁く訪問されている。運動会にも参加され、自らの視点で支援を行っている。

【全体に関する事項】

- ・ 学長就任初年度に当たる本年、大学の本分である教育・研究・社会貢献に関して、大学内におけるコミュニケーションを大事にし、秀でた行動力・発信力をもって、学長としてリーダーシップを発揮している。大学の本分を全うする上での前提となる大学の運営についても、自らのビジョンを明示し、「オール千葉大学」として積極的に取り組んでいると評価する。
- ・ 各評価項目に目配りをして、情熱をもって基本方針に沿った大学運営に当たられてきたと思う。成果は必ずあらわれると思う。2年目以降にさらに期待する。
- ・ 前学長の急逝、学長選挙を巡る学内からの反発のなかで、学内取りまとめに尽力、学長就任1年目を順調にスタートさせたと思う。そうしたなかで、各部署で様々な改革が継続して着実に進められているのは心強い。
- ・ 前学長の急逝に伴う学長就任ということで、1年目はこれまでの大学運営に破綻をきたさないように努めてこられたことは十分に見て取れ、評価に値するものと判断できる。
- ・ 新任教員との意見交換、本学主催の高大連携イベントにおける高校生との交流、附属学校関係者との対話等、学長が新たに組み込まれた事項から学長が目指す大学像が窺える。若い世代の育成は長期間の継続的な取り組みが必要であり、成果が比較的短期に表れやすい大学運営や研究などの事項に比べて、これまでは施策の重点項目になりにくかったと思われる。高校生理学研究発表会で学長がポスターの説明を聞き発表者と話をされている様子や、中高生数理科学コンクールの表彰式で受賞者が学長と嬉しそうに写真を撮っている様子を横から拝見していたが、いずれの機会も高校生が科学へ取り組むモチベーションを高めているように感じた。このように、将来本学のみならず我が国を支えてもらわねばならない世代の育成のための基盤作りに努力されている学長の姿勢を評価している。
- ・ JSPSやJSTなどファンディングエージェンシーへの訪問（研究）、記者懇談会の開催（社会貢献）、大使館関係者や海外の大学トップとの懇談（国際化）、創薬エコシステムサミットへの国立大学代表としての参加（その他）など、さまざまな分野において人的ネットワークの構築と拡大に尽力されている。これらの活動は本学の可視性を高め、情報発信力の強化に繋がるものだと考える。

- ・前学長の逝去を受け、慌ただしいスケジュールの中で学長に着任されたというやや特殊な状況での学長業績評価となった。その中で、「世界に冠たる千葉大学」の理念のもとで進行中であった前学長の施策を基本的に踏襲しながらも、新学長のカラーを出しながら大学運営を行ってきた点は高く評価できる。特に、学長選考に端をなした各部局の事情を背景とした様々な意見が出ている中、各部局との対話を加速させたことは学長の大きな業績であるといえよう。前学長が遺してくださったJ-PEAKSが発足し、データサイエンスコアの設置や、千葉大学コネクトの設立など、研究・事業の推進の為に準備も粛々と進められていることも高く評価したい。病院長時代に始めた「病院長メール」を拡大し、千葉大学の全構成員へ向けた学長メッセージの一斉送信をはじめられたが、この取り組みは今後学長の声を直接届ける重要な媒体となるものと期待する。学長の創薬エコシステムサミットでの提言は、国立大学の研究環境の改善を求める全国の声として、政府および国民に届けることができ、特筆すべき成果である。

学長への要望事項、学長へ期待する事項：

【大学運営】

- ・中央教育審議会の答申「我が国の『知の総和』向上の未来像～高等教育システムの再構築～」を踏まえて、千葉大学の「将来構想」の検討が行われているということであるが、千葉大学が先導し他の大学に範を見せる心構えで、スピード感を持って、千葉大学の更なる進化のための方策・施策に果敢に取り組んで頂きたい。
- ・ガバナンス強化は、本学にとっても最重要課題の一つであり、本件の継続的対応を期待する。
- ・多分野で新しいセンターや機構が意欲的に新設されたが、これらを目的通りに機能させる為には、定期的にPDCAの歯車を回していくことが必須で、学長の強力なリーダーシップを期待する。
- ・「つねに、より高きものをめざして」という基本理念に全く賛同する。首都圏にある総合大学としての千葉大学のポテンシャルは高いと思う。学内が協働して、教育、研究の両面にわたって活力みなぎる大学となってほしいと思う。
- ・入学時、卒業時以外に、教職員、学生に、学長が直接講話する機会を年に1度くらいもてないものか。
- ・国立大学協会で大学経営や病院経営の問題を訴えて頂いているが、更なる進捗があることを期待している。
- ・「YOKOTE VISION」の構成要素は理解できたので、さらに方略の具体を示していただき、各部局の強みや方向性を生かしながら、双方向で大学が成長できるようリーダーシップを期待したい。
- ・学長と部局長の意見交換では十分に時間をかけていただいたが、提示した課題に対するフィードバックが一部ない内容もあったため、今年度は解決に向けて意見交換の場をより活用したい。
- ・前学長の任期中の逝去に伴う学長の交代だったため、就任一年目の昨年度は学長としての独自色を出しにくかった面があると推察する。昨年度末にYOKOTE VISIONが策定されたところであるので、これからは期待している。大学全体および大学病院の財政に関する問題や、18歳人口の減少を見越した教育研究組織の見直しの必要性など、国立大学はどこも同様の課題に直面しているが、ぜひ学長には本学が目指す大学像に関するご自身の考えを、構成員に対してより具体的に披露していただきたいと考えている。若手をはじめとする多くの教職員の意見を吸い上げて決定に至る学長の大学運営には共感する部分が多く、個別のテーマに関してはぜひそのやり方を継続していただきたいと考えているが、大学全体として舵を切らねばならない方向性に関しては俯瞰的立場の学長からお示しいただくしかなく、それこそが学長のリーダーシップの正しいあり方だと考えている。
- ・昨年度当初に学長と各部局執行部との意見交換の機会があり、就任当初の学長の考え方を伺う良い機会となったと思う。今後は、執行部以外の部局構成員との意見交換の場もぜひ作っていただきたい。
- ・大学への運営費交付金は今後も大きく減り続けることが予想され、厳しい財政状況の中で、各大学は生き残りを懸けた難しい舵取りを進める必要がある。そのために、大学がなすべき改革は、しっかりと理論的な裏付けの下で、着実に進めていく必要があると思われる。文部科学省は「大学が変わる」ことを強く求めており、その中で学長が果たす役割は大きく、各部局の状況を把握いただきながら、果敢に改革を進めていただきたい。

- ・文部科学省がどのような指標によって各大学を評価しているか、千葉大学が全国でどのような立ち位置なのかなどの大学の運営上重要な事項については、全教職員が理解する必要があるように思われる。しかしながら現状ではこの理解は決して十分ではない様に感じられる。各部局の教職員に対してこれらの認識を浸透させ、厳しい現状の理解する取り組みを進めていただきたい。
- ・J-PEAKSの継続審査が5年後に控えており、早急に研究・教育活動体制を整備し、成果を出していくことが必須である。このためにも学長のガバナンスのもと、世界に伍した研究・教育活動を推進できる体制作りを推進していただきたい。
- ・J-PEAKSを軌道に乗せることができたが、特定の分野の発展にとどまらずに、大学全体の発展にこの事業が展開できるかを意識されることを期待する。
- ・C-DEIB推進宣言は職場環境の規範を示す重要な基本方針だが、看板を掲げただけで形骸化したものにしてはいけないかと思う。この基本理念を遵守するという姿勢を学長が率先して、ことあるごとに表明されることを期待する。

【教育】

- ・AIデータ教育は、文系学生の履修を促進する環境整備が望まれる。
- ・教育に関しては、着任からまだ1年ほどということもあるが、残念ながらこれまでの活動を踏まえての改革が進んでいるとはいえない印象である。例えば普遍教育が、大学全体のリソースを使ったものとはいえ形骸化していないか、あるいは全員留学に伴う受け入れ留学生の増大に対応できる教育体制になっているかなど、これまでの教育体制をどうしていくべきかの十分な理解と行動が求められると思う。そして学部を横断する学位プログラムの構想は、昨今文部科学省からも求められているが、部局のかべを越える学びの仕組みをどう考えるか。教育の課題には、十分に取り組んでいただきたいと思う。古い既成概念を打破されることを期待する。

【研究】

- ・今後、若手研究者が研究時間の確保、資金の問題をクリアできる支援がさらに活性化することを期待する。また起業などのサポートも重要な点かと思う。
- ・大型の研究費以外にどのように大学支援の寄付などを集めていくかも今後の課題かと思う。

【国際化】

- ・「全員留学」については、運営上の課題は山積みだが、ここまで関係教員、担当事務系職員が積み上げてきたノウハウが無駄にならないように運営の改変に力を入れていただきたいと思う。学生のニーズそして能力に合わせてカスタマイズできる留学のあり方を示せるのは、千葉大学の強みでもあることをご理解いただければと思う。

【附属病院】

- ・附属病院においては、前病院長として、地域に信頼を与える存在として大学同様のガバナンスが機能できるように引き続き考えていただきたいと思う。「大学と病院は別」という枠組みはもたれていないかとは思いますが、一体の組織であることを意識していただきたいと思う。

【附属学校】

- ・附属学校の在り方についても、経営協議会の中で年に何度か紹介があれば、と考える。

【その他】

- ・リサーチパークは未来があると思う。学術・研究の場ではあるが、県民の健康増進や疫学など、薬学、看護、医学部、附属病院などと連携した試みを期待する。

【全体に関する事項】

- ・学長就任1年目にして、千葉大学全体を見渡し、情熱的に学長としての任務を果たしたことは高く評価できる。個別の項目については特筆事項に書いたが、次の年度の報告までに留意してほしいのは、次の4点である。
 - ①運営の項で、財務状態とその分析、大学としてなすべきことについて記すこと。
 - ②各学部の教授会に赴き、全教員と率直な意見交換を行うこと。
 - ③教員、附属病院医師、事務職員の働き方改革を進めること。
 - ④業績調書は、官僚的表現をやめ、学長の声が聞こえるように書くこと。
- ・国立大学法人を巡る環境が厳しさを増すなかで、千葉大学が目ざすべき方向をより明確にし、改革の流れを加速化し、全学が一致して取り組むことを求められており、学長にはより強いリーダーシップの発揮を期待したい。
- ・特に無いが、学長のオリジナリティを発揮してほしい。
- ・2年目以降が本当の評価になると思われる。特に、次の2点について要望・期待したい。
 - ①労働環境の向上・健全化
厳しい財政難の中、人事院勧告が重くのしかかっていることは承知している。ただ、その中であっても、多くの国立大学が、4月1日に後ろ倒しするなどの措置を執ることはあっても、令和6年度の人事院勧告に準拠し、勧告を守れなかった国立大学は少数であると耳にしている。給与は職場を決める上での大きなファクタであり、教員は民間ベースの給与水準にある私立大学に流れ始めており、職員は他の自治体などへ転出していくことを目にする。職場としての千葉大学が魅力的になるように、特に財務のIRを精査し、労働環境の向上・健全化を図って頂ければと切に願うところである。
 - ②次の千葉大学を担う人材の積極的な登用
長年にわたって大学執行部の顔ぶれが変わっておらず、次世代を担う人材が見えてこない。国立大学の置かれた厳しい状況にあっては、思い切った若返りを図るなど、上層部を刷新する活性化が必要のように思われる。現在、学長を中心にした将来構想検討WGが立ち上がりつつあるので、その中で、人も含めた新しい方向性が見えてくるものと期待したい。
- ・業績調書に記載のない重要課題が二つあると思う。一つは教員人事に関することで、学長の当初の意図に反し、人事院勧告への対応のため不幸にも「3年不補充ルール」を1年延長せざるを得ない事態となったが、今後の人件費の捻出方法とともに全学的な人事計画の方向性について展望をお示しいただきたい。今一つは前回の学長選考を契機として問題となった経営協議会学外委員の選任に関することで、昨年度初頭の教育研究評議会において学長は1年後を目処に検討することに同意されたが、先に学長選考・監察会議より提出した学長選考・監察会議の学外委員の選考方針等に関する検討依頼と併せ、検討結果をお示しいただきたい。

その他コメント：

- ・『経営改革』についての項で、千葉大学の財政状況について触れていないのは不十分と言わざるを得ない。苦しい予算状況の中で、教員の要望に応えられない点が多いと思うが、どのような対策があり得るのか、調書に書いてほしかった。
- ・教職員のモラル維持・向上を図るための施策を定期・継続的に実施する事が本学にとっても必須の課題だと思う。（例えば研修etc）
- ・学長におかれては、学長に選出された後、学内等から選考結果等について様々な意見が出され、厳しい船出だったと思う。そうした中で、学長には決然として動ぜず、所信を貫徹すべく大学運営に当たられた。もとより、学長選考は法令に従い正当な手続きを経て行われた。学長には、今後とも意欲と自負を持ち、千葉大学の発展に尽くされることを期待する。
- ・入試業務における教員の負担軽減は重要な視点だが、監督・採点業務以外に、より専門性の高い作問業務においても、不補充計画による深刻な問題が生じており、全学的な対策を求めたい。

- ・ 全員留学に関しオンラインを含め運用が柔軟化したことは好ましいが、渡航費や生活費の高騰により希望する国・地域に留学できない、あるいは逆に一部の国・地域の留学プログラムに定員を超える希望者が集中する等の問題も生じており、支援のあり方についても検討が必要かと思われる。また留学生の受入れについても、全学レベルでの支援制度に加え、部局レベルでのきめ細かいサポートを補助する必要があるかと思う。留学生の半数以上は中国語圏から来ているのだから、英語のみならず中国語環境の充実を検討してもよいように思う。
- ・ 収益を伴う事業への取組は重要だが、千葉大学コネクトの設立やネーミングライツの契約等、一般の教職員の十分な理解が得られていない嫌いがあり、他大学の事例との比較なども踏まえた丁寧な説明が必要と思われる。